

Plus の文法的発達

——コーパスと意味的プロソディ——

深 谷 輝 彦

A Grammatical Development of *Plus*

—Corpus and Semantic Prosody—

Teruhiko FUKAYA

0. はじめに

小論では、まず英単語 *plus* の語彙的・文法的性質について先行研究の成果を略述する。次に、現代英語コーパスから得られる *plus* の資料をもとに、*plus* とコロケーションを成す語群の観察という手法を用いて *plus* 特有の意味を抽出する。*plus* の特徴をより明確にとらえるために、数学では反対語にあたる *minus* との比較検討を適宜行う。議論をより具体的にするために、イギリス英語の最新英英辞典 NODE (1998: 1428) の記述から *plus* の品詞と定義部分を引用する。

(1) *plus*

(preposition) 1. with the addition of

(informal) together with

2. (of temperature) above zero

(adjective) 1. [postpositive] (after a number or amount) at least

(after a grade) rather better than

2. (before a number) above zero; positive

3. having a positive electric charge

(noun) 1. short for plus sign

2. an advantage

(conjunction) (informal) furthermore; also

これとアメリカ英語の EWED (1999: 1387) を比べると、名詞と形容詞の分類に若干の相違点があるものの、与えている品詞、意味の範囲はほぼ同じであるといえる。本稿では、上記の定義のうち、前置詞と接続詞に注目し、*plus* の文法化のすすみ具合を検証することを目標とする。

1. 辞書、語法書、文法書の記述

OED2及び寺澤（1997）によれば、ラテン語から英語に入った *plus* の前置詞的用法の初出年度は1668年である。OED2の例文を追うと、当初は数字表現に使われていた *plus* が普通名詞を並列する用法を獲得する様子が見えてくる。

- (2) a. 1674 ... in 1800 seconds plus 360 second, or in all 2160 seconds.
- b. 1823 ... A deaf handmaid, and a clerk-plus-gardener-plus-groom by no means dumb
- c. 1891 ... The same sum as that stated in the balance order, plus further interest

このように前置詞用法を発達させてきた *plus* は1960年代に入ると、アメリカ英語を中心に接続詞として使われ始める。

- (3) a. 1968 If, on the other hand, a tom tells you to get off the streets and you don't ... plus if you encourage him in a physical way to come on over to your side, then you've made a friend.
- b. 1972 There was rain on the roof, and I was poor. Plus my mother was sick.

以上の通時的観察から、*plus* については前置詞用法から接続詞用法へという方向が確認できよう。Burchifield（1998：602-3）は、現代英語で *plus* は広告という言語使用域で好んで使われ、他の使用域ではくだけたスタイルでのみ使われる、と指摘する。

Morris and Morris（1985：471）は、*plus* = *and* という等式が成立しない点を、主語と動詞の数の一致という文法現象で例証する。

- (4) a. His intelligence plus his youth makes him a prime candidate for the job.
- b. His intelligence and his youth make him a prime candidate for the job.

(4a) では、*makes* という動詞は *his intelligence* のみと一致するために、*-s* がつく。他方、(4b) の場合、*make* は *his intelligence and his youth* という複数主語と一致しているため、*make* という形のままである。この事実は *plus* を前置詞として指定すれば説明がつく。但し、安藤、山田（1995：404）や福井（1996：151）は、*plus* が時として接続詞 *and* と同じように複数一致する例をあげる。

- (5) a. Good planning plus hard work make for success.
- b. His arrogance plus his impatience make him intolerable.

「一種の複主語を構成していると感じられる場合は複数扱いとなる。」（安藤、山田、1995：404）という。Peterson（1999：141）はこのようなアンビバレンスは等位接続詞 *and* でもみられるとし、次例をあげる。

- (6) a. Peanut butter and jelly taste good together.
b. Peanut butter and jelly tastes good together.

さらに plus と異なり, minus ではこのような数の一致のゆれはないという。主語が minus 句を含んでも, 数の一致は minus 句に先行する名詞とのみ行われる。それゆえ, minus は前置詞であるという立場をとる。

記述文法書の代表格である Quirk et al. (1985 : 667-8) をみておく。plus は, 周辺的前置詞群に属し, less, minus, plus, times, over とともに, 数字関連前置詞という群を構成する。さらに, minus と plus は数字以外の文脈でも使われるという共通性を持つ。

- (7) a. I hope he comes minus his wife. [“without”]
b. She’s had mumps plus measles. [‘and’]

ところが, 接続詞用法まで発達させているのは, plus だけで minus は前置詞のみである。NODE (1998 : 1179) から minus の定義を引用してみる。

- (8) minus
(preposition) 1. with the subtraction of
(informal) lacking; deprived of
2. (of temperature) below zero
(adjective) 1. (before a number) below zero
2. (after a grade) rather worse than
3. having a negative electric charge
(noun) 1. short for minus sign
2. a disadvantage

(1) と比べて, 最大の違いは, minus が接続詞用法を欠いている点である。その他は, 品詞と意味の両面でみごとな平行性を示している。

最後に, plus の統語的ふるまいを綿密に調べた Peterson (1999) から, これまで言及していない plus の特徴を箇条書きであげる。Peterson は等位接続詞の基準をあげ, plus はそれらをほとんど満たしている, 従って前置詞や従属接続詞には属しないと結論づける。

(i) plus は統語的に同等な要素を連結する。

- (9) a. I have to write an essay plus finish this assignment before next Friday.
b. *I have to write an essay plus finishing this assignment before next Friday.

(ii) plus で連続的に連結された要素は統語的に階層関係を形成しない。

- (10) He owns three cars: a Mercedes plus a Volvo plus a Bentley.
cf. Kim is angry because Pate is late because the car has broken down.

(iii) plus は連辞省略 (asyndeton) を許す。

(11) He owns three cars: a Mercedes, a Volvo plus a Bentley.

(iv) plus が連結する要素を転換しても命題の意味は変わらない。

(12) a. I have an essay to write plus a meal to prepare.

b. I have a meal to prepare plus an essay to write.

(v) plus は後続する等位要素の先頭に生起しなければならない。

(13) a. It has been raining all week, plus there is a howling southerly.

b. *It has been raining all week, there is plus a howling southerly.

(vi) plus は, moreover らとは異なり, and と共起できない。

(14) a. *John tried very hard and plus he won.

b. John tried very hard and moreover he won.

本論の目的からはずれるので事実の指摘にとどめるが, (14a) の直観判断は言語事実と一致しない。CobuildDirect コーパスを検索すると, and plus という連鎖が41例も見られる (vii) plus 句を前置することができない。

(15) a. I want an ice cream plus a milkshake.

a'. *Plus a milkshake, I want an ice cream.

b. John plus his minder can be a handful.

b'. ?? Plus his minder, John can be a handful.

b''. With his minder, John can be a handful.

ここでこの前置可能性テストを minus に適用してみると, minus の前置詞性が明確になる。

(16) a. John minus his minder is no threat.

b. Minus his minder, John is no threat.

c. Without his minder, John is no threat.

minus は, 前置詞の without と同じように, 前置が可能である。

しかしながら, plus は and と全く同等に等位接続詞として行動できるか, と問えば, 否と答えなければならない。その違いとは, plus が連結できる要素が完全名詞句, 裸の動詞句, 及び定節に限定されているという言語事実にある。

- (17) a. *? I overslept plus missed the train.
 a'. You should eat less plus get more sleep.
 b. *They found her husband plus young son alive and well.
 b'. They found her husband plus her young son alive and well.

(17a) が示すように、時制を伴った動詞句を plus で連結することはできない。しかし、(17a') では、助動詞が要求する裸の動詞句の場合 plus の使用が容認される。(17b) の plus は、husband と young son という名詞句の中間範疇（生成文法的にいえば X'）をつないでいるので非文法的と判断される。他方 (17b') のように、plus が完全名詞句をとれば、文法的な文が得られる。Peterson は (18) をあげて、plus が連結する等位要素にきびしい制約があることを示す。

- (18) a. *It was plus is an unfortunate state of affairs.
 b. *It is an unfortunate plus regrettable state of affairs.
 c. *He acted swiftly plus decisively.

plus による時制を伴う BE 動詞、形容詞、副詞の連結がいずれも容認されない。

2. コンピュータ・コーパス資料の検討

本章では、次の三つの疑問についてコンピュータ・コーパスから得られる資料を提示し、plus の語法と意味について考察を深める。

- (i) plus はどのくらいの頻度で起こるのか。言語使用域による頻度差がみられるのか。
 (ii) plus は接続詞用法をどのように発達させているのか。
 (iii) plus はどういう語とコロケーションを形成するのか。and と比べて plus 特有の意味が認められるのか。

(i), (ii)については、先行研究のなかにすでに重要な洞察が見られるので、それらの妥当性をコーパス資料で検証したい。(iii)についてはこれまで正面切った研究はないし、またコロケーションをどう定式化するかという問題も解決をみていない。ここでは、plus 固有の意味特徴についてあえてインフォーマルな形で二つの提案を行い、それらがコロケーションとしてどのように実現しているか、コーパスからの豊富な資料とともに議論したい。

それでは、plus の頻度に関する検討から始めよう。次のデータはオンライン・コーパスの一つである CobuildDirect (約5000万語規模) から得られた plus の頻度とその下位コーパス別頻度である。

- (19) PLUS=6523 matching lines.

Corpus	Total Number of Occurrences	Average Number per Million Words
usephem	616	503.0/million
ukephem	1017	325.5/million
ukmags	1313	167.9/million

sunnow	744	127.7/million
oznews	532	99.7/million
today	513	97.7/million
times	524	90.9/million
ukspok	613	66.1/million
npr	134	42.8/million
bbc	110	42.1/million
usbooks	237	42.1/million
ukbooks	170	31.8/million

5000万語の中で、6523回 plus が使われているという頻度は、argue, bridge, danger, female, obvious, sea というような語と同じ第二位の頻度帯（701-1900位語）に入る。基本的な機能語 the, and, of, to や like, go, paper, return などが入る第一位頻度帯（上位700語）の次である。したがって、中核的な前置詞の頻度に比べると頻度が落ちるものの、Quirk et al. (1985) らが周辺的前置詞と呼ぶだけの頻度でコーパスに実現しているといえる。

plus が頻出する言語使用域として、WDEC (1989:747) は、話し言葉、広告、軽い内容の散文をあげる。このうち、広告や軽い内容の散文という分野は、上のリスト第一位、第二位を占める短命印刷物 (ephemera) において実現している。plus のスピーチ・レベルとして多くの辞書が略式体 (informal) であるとするのは、このような言語使用域を plus が好むという事実を表している。但し、上のリストで話しことばである ukspok が第八位にあるのはなぜか、という問題が残る。第一の理由は、usephem (米語) と ukephem (英語), npr (米語) と bbc (英語), usbooks (米語) と ukbooks (英語) という対をそれぞれ比較すると明かなように、米語と英語のうち plus を好んで使うのが米語である。しかしながら上の CobuildDirect コーパスには残念ながら usspok がない。つまり、plus を好む米語話し言葉が入れば「話し言葉」はもっと上位にあがるだろう。第二に、上の順位表第三位から第七位に位置するのがいずれも新聞雑誌であり、これらの中に広告や軽い散文が入っていることはいうまでもない。

minus の頻度について一言ふれておく。CobuildDirect コーパスで検索すると、502例しかヒットしない。plus の1/10以下の頻度にすぎない。さらに、上位五位までの下位コーパスと頻度をあげると、1. ukspok (22.5/million), 2. usephem (9.8/million), 3. sunnow (8.6/million), 4. npr (8.1/million), 5. oznews (8.1/million) となる。minus と plus の比較論にとって最も大事な課題は、なぜ plus と比べて、なぜこれほど minus の頻度が落ちるのか、ということである。minus は上述したように可能な意味範囲は plus とよく対応している。しかし、頻度となると大きなギャップがある。こうした頻度差は like と unlike でもみられるので、言語の意味体系上の理由があるのかもしれない。

この章の始めて設定した第二の疑問に議論を移そう。Burchfield (1998:603) には、plus の接続詞用法は1960年代あたりから米語で発達し始めた旨の記述がある。この記述が正しいかどうか、1961年の米語書き言葉100万語を収集した Brown Corpus (BROWN) と1991年の対応する米語書き言葉100万語を収集した Freiburg-Brown Corpus (FROWN) を比較調査してみる。(20) は品詞別に二つのコーパスでの頻度数を表している。

Plus の文法的発達

(20)	BROWN (1961)	FROWN (1991)
[preposition]	69 (89.6%)	31 (60.8%)
[adjective]	2 (2.6%)	3 (5.9%)
[noun]	4 (5.2%)	5 (9.8%)
[conjunction]	2 (2.6%)	12 (23.5%)
Total	77 (100%)	51 (100%)

100万語という規模の限界を感じながらも、確かに BROWN から30年たった FROWN の方が接続詞用法を増加させている。実際の生起数よりも比率で比較してやると、その増加率はかなり大きい。しかし、この程度の実例数で証拠になるのかという批判にも一理あるので、これ以上の解釈は避けたい。

接続詞用法の発達については、すでに見てきたように辞書、語法書は次のような例文をあげて接続詞、あるいは接続副詞というラベルを貼っている。

- (21) a. It's packed full of medical advice, plus it keeps you informed about the latest research.
 b. You can fly an airplane ... and command a ship. Plus you ride horses.
 c. So I'll quit romanticizing him. Plus, he never got to go on any road trips.

しかし、見逃してはならないのは、前置詞 plus が接続詞へ文法化を進めるときに、一気に前置詞から接続詞が生まれているわけではないという事実である。言い換えれば、接続詞用法が発達するまでに中間段階があって、それらの段階を基盤にしながら接続詞用法が成立したという点である。そして、現代英語においてもまだその中間段階とも呼ぶべき例文群が生き生きと使われているのである。Burchfield (1998 : 603) は次例を記録している。

- (22) I'm a pianist, but I feel all thumbs today. Plus which I've got a cold—*New Yorker*, 1987.

言うまでもなく、which は “I feel all thumbs today.” を先行詞ととる関係詞で、それを前置詞 plus が先導する形をとっている。CobuildDirect からは次の三例が検索できる。

- (23) a. arts cinema Mm And plus which it's a big deal for me to get
 b. and had a lot of food put by, plus which the Red Cross has been
 c. chef-wizard of Oos, Albert Kellner. Plus which, a complete medical check-up

これらから which が脱落すれば (21) の接続詞用法が生じることは容易に想像される。コーパスはまた (24) のような plus the fact (that) という連鎖を30例も生み出す。

- (24) a. talking for the benefit of the tape. Plus the fact this is confusing a
 b. rid of the build-up of the traffic. Plus the fact travelling you know
 c. so I had to use the back. And plus the fact we have had a fire
 d. harp, the desire to stay together, plus the fact we still love it. Arse

(24) の例は、(25) のような plus the fact that という plus + 名詞節から that が脱落している、そしてその分だけ文法化が進んでいるといえる。

(25) I don't think we should go on holiday in August—it'll be too hot—plus the fact that it'll be more expensive. (CIDE: 1085)

英英辞典 CIDE はこの構文の頻度を意識して例文としてわざわざ (25) を引用している。

コーパス検索の有意性の一つは、コロケーションの発見にある。つまり、大量の実例を集めそれらを前後いずれでもアルファベット順に自由に並べることができるので、コロケーションを成す連鎖を実に見やすい形でディスプレイ上に示してくれる。この機能を活用して、plus と頻繁に共起する語や句を調べ、そこから plus について二つの意味特徴を提案し、それを支持する具体例をあげたいと思う。

plus のコロケーションの精査を通じて第一に気がつくのは、plus の with the addition of という前置詞の意味に名詞 plus の advantage という意味が反映していることである。つまり、plus に後続する additional element は話し手、聞き手いずれかあるいは双方にとって advantage となるものである、という仮説が建てられるのである。その証拠の一つとして、plus + you という連鎖を検索してやる。すると次のような行が全部で 58 行も得られる。

- (26) a. thing, there's the dividend yield. Plus, you're almost guaranteed that the
- b. able to start saving right away. Plus, you'll always be able to call our
- c. a guide to safe back exercise. Plus, you'll receive a 250-page Abflex
- d. your dream home right away! Plus, you'll also receive great bonus
- e. 1996 to & pound; 10,507.50. Plus, you'll get all the interest you've m
- f. the tongue for foot-hugging fit. Plus, you'll be enjoying the comfort of a
- g. be able to start saving right away. Plus, you'll always be able to call our
- h. at least equal if not better value Plus, you have got a mobile unit, so you'
- i. any more. With Sun Alliance Rescue Plus, you have access, through IAS, to a
- j. July 1, 1996, with no annual fee. Plus, you can transfer balances to save

そして、plus に後続し plus とコロケーションを形成している連鎖は、(27) のようにまとめることができる。

- (27) a. (plus you) + get + NP (及びその変種)
- b. (plus you) + can/will + VP (及びその変種)

get の他に繰り返し出てくる動詞は、have, receive, enjoy 等である。これら共起する語の共通点は、聞き手が plus you 以下の動作により advantage を得ることである。get という動作の受益者は聞き手であるし、can や will の後にくる動作も聞き手に不利な動作は見あたらない。聞き手は喜ぶことはあっても、損する動作は VP のところに起こっていない。以上を一言で言うと、聞き手にとっての advantage が plus という単語を引き出している、とい

う一般化になる。

plus = advantage という仮説を支持する二番目の証拠は、plus の後に起こる形容詞で最も高頻度な語が free であるという観察である。

- (28) a. life pension of & dollar; 69,000, plus free travel etc, when she retires
- b. your competition entry proposal plus free places on the Direct Marketi
- c. from only 50p each p amp; p. Plus Free! See inside for details
- d. HOLIDAY MAGIC festival, plus FREE ADMISSION and FREE P
- e. VALUE PLUS date/price Plus FREE AIRFARE date/price
- f. 22-man squad for a whole week plus free first-class flights. An ocean
- g. guests at the Show on October 28, PLUS free rail travel to a London
- h. thimble to start their collection, plus free membership of the club, so
- i. A family pass to the show is given, plus free shuttle service to the
- j. Offer 05 May 1998 PLUS FREE pint of Boddies with ever

上例は plus のすぐ後に free が来る例を挙げたが、plus から数えて五番目までに free が起こっている例を数えると、144例もある。plus の後五語範囲内で起こる頻度に基づいて頻度表を作るとき形容詞の中で free が飛び抜けて第一位であり、全品詞で並べても第十位に位置するほどである。どれほど plus と free の相性がいいか、理解できよう。他に、plus と共起する形容詞を頻度順にリストしてやると、

- (29) new, big, right, extra, full, special, great, high, additional, easy

これらの単語を含んだ句や節が常に advantage になるという保証はないけれども、disadvantage より advantage になる可能性が高いポジティブな形容詞群だといえる。

ここで、plus と広告という言語使用域がなぜ結びつくのか、という問題に立ち戻ろう。plus は広告で極めて頻繁に使われるという指摘はあるが、なぜそうなのかという説明はされていない。筆者の見解では、それは plus が広告の読者にとって有利なことを表すのに適切な単語だからである、ということになる。and では広告読者を喜ばせることができない。plus という語を見たり聞いたりして初めて、読者は広告に興味を持ちその advantage を知るため、広告を読んでみようという行為に駆り立てられる。そして、最終的にはその advantage にひかれて商品を購入するという広告の最終目標の達成に大いに貢献する。やや大げさな言い方が許されるならば、plus は広告作成者の広告ストラテジーにとって不可欠な語であるともいえる。

では具体的に広告はどのように plus を活用しているのだろうか。次の例を見て欲しい

- (30) a. etc. Call-out charge & pound; 28, plus travel expenses. 24-hour emergency
- b. and each one includes match tickets plus travel and accommodation for two
- c. 2 years of age on the day of return) plus travel insurance premiums (where
- d. one of 50 pairs of World Cup tickets plus travel by Eurostar, accommodation

- e. to the value of & pound; 150 p. a. plus travel expenses. The scholarships

(30d) を例にとって plus の使い方を説明しよう。ワールド・カップの切符という魅力あるものを広告読者に示し、さらにそれだけでなくヨーロスターでいく旅行、まだまだ宿泊費も入っています。そういう advantage がついています、という意味が読者に伝わり、こうした advantage に弱い広告読者の心理をうまくついている。もしここで plus の代わりに and を用いたとすると、読者は and 以下のものを特別なものではなく当たり前と理解してしまう。これでは宣伝効果の面で失敗である。plus がもたらす、読者は advantage を受けるに値する特別な人ですという効果が生まれない。以下の例も同様に考えることができる。

- (31) a. engineering and manufacture, plus the chance to get your hands
 b. We've got five to give away plus the chance to save cash buying
 c. family in and around the stadium — plus the chance to taste the spons
 d. choice of six exciting resort hotels plus the chance to stay in Camp D
 e. opportunities to meet the winemakers plus the chance to soak up the
 f. scale Columbia Shuttle to explore plus the chance to bring her in for a
 g. guarantee the return of your capital, plus the chance to win THE CH
 h. to wild and eroded highlands. Plus the chance to discover some
 i. To be a Strikers supporter, plus the chance to meet Thor, see

plus the chance to という連鎖が固まりとなって広告読者に働きかける。その時、the chance が広告において期待される効果を果たすには、plus = advantage という意味がものを言う。

plus = advantage という意味で括ることができるコロケーションの他に、もう一つの plus で始まるコロケーションが群をなしている。それをここでは便宜的に plus の付け足し (tag) 用法と呼ぶこととする。こちらの用法では、plus 以下の要素は読者はたぶんご存じだとは思いますが、一応念のために述べておきます、という程度のつまり付け足しに過ぎないものですがと断りを入れる plus の使い方である。その代表例が plus VAT という句である。

- (32) a. pound; 270 plus VAT to & pound; 18
 b. pound; 60 plus VAT; Limnio 1983 p
 c. at & pound; 795 plus VAT, the TF 232 at
 d. cost & pound; 125 plus VAT for a day
 e. pound; 145 plus VAT disbursements
 f. retails for & pound; 199 plus VAT. The U. K.
 g. It cost 4,085 plus VAT, he was forced
 h. a fee of & pound 12.50 plus Vat. This database,
 i. a fee of & pound; 500 plus VAT.
 j. a charge of & pound; 25 plus Vat and boating

plus に続く名詞では VAT は第一位で 109 例を数えることができる。英語話者であれば日常

生活でいつも VAT を意識しているはずであるから、あくまでも付け足し情報であり、決して特別なものではない。情報の重要度という点から言うと、

- (33) a. Duty and VAT will be charged at ...
b. UK mainland delivery, insurance and VAT
c. including packing, postage and VAT
d. ... and breakfast basis, service and VAT

という and VAT という表現の方が、VAT に重みがある。

plus VAT 以外に tag 的な目的語をとる plus としては、次のような例がコーパスのなかで高頻度なコロケーションといえる。

- (34) a. plus your name and address
b. plus your details including your phone number
c. plus (applicable) tax (es)
d. plus shipping/postage and handling
e. plus interest
f. plus insurance
g. plus expenses/costs

VAT と同様に、いずれも付加的なものばかりで、かつ大人の常識を備えた人ならばだれでも容易に見当がつく語群である。聞き手、読み手に対して、ご存じでしょうかどうも忘れないようにお願いしますというメッセージを伝えている。

この種の plus を特徴づけるデータを二つ追加する。一つは、付け足し plus は「付け足し」という名前が語るように、しばしば括弧 (parenthesis) をその両側にとる。これは決して義務的でないが、括弧付きの付け足し plus は 65 例ほど CobuildDirect コーパスで検索できる。

- (35) a. 8.90 (plus handling fees) for 400 checks!
b. 25 each (plus p & p) and ...
c. ... return the first hundred names (plus phone numbers)...
d. 13.8 APR (plus deposit and final payment)
e. 55 (plus optional cancellation insurance)
f. ... four sisters (plus a cousin) might constitute something ...

句読点に関する文献は、括弧とは本文に説明を加えたり補足する語句、文を挿入する時に用いると、規定する。(35) の例にある括弧はまさに補足的であり、その括弧の機能と付け足し plus は相性がいい、といえる。plus の付け足しの性格を示すもう一つのコロケーションは (36) の plus + of course である。

- (36) s taken care of automatically. <p> Plus, of course, with a BT Monthly Budget and kites to fly for young and old — plus of course help and guidance, and if that hard graft and application work. Plus, of course, a little help from his international exhibits and displays. Plus, of course, it has an incomparable think the combination of that figure plus of course public funding that comes our overtime it's very very expensive Plus of course their salary if they don't and a mess of springs, wires etc. Plus of course, the optical character and two on the other strokes. Plus of course the two medley events as responding like we thought it would. Plus, of course, there's been these arrests they can generate themselves. Plus, of course, the fact they'll get and Monica Sinclair's Lucy. Plus, of course, Sergeant himself. <p> actor-director Douglas Hodge. <p> Plus, of course, Willy Russell, himself a have to pay the suspended premium, plus, of course, the premium due to the

of course という句を英英辞典は “You say **of course** to suggest that something is normal, obvious, or well-known, and should therefore not surprise the person you are talking to.” (Cobuild: 1142) と定義する。すると, plus 以下の内容は, 読者の知っている明らかなことですが, という合図をしていることになる。そうした of course を plus がコロケーションを成すということから, plus の付け足しの意味的性質が十分に伺える。

plus のコロケーションのうち, その付け足し用法のもう一つの証拠となるのが plus other ... という連鎖であり, 37例検索できる。

- (37) a. ... then a video to watch, plus other activities ...
 b. ... this is the house's original cost plus other 'allowable' expenses.
 c. FREE ADMISSION and FREE PARKING, plus other benefits all year.
 d. There were 18 players on board plus other players.
 e. ... photographs, models—plus other work

(37) のいずれの例をみてもわかるように, 中心となる要素を先にあげて, 最後に日本語でいう「等」や「その他」に相当するところに plus other NP が生じて文が終了している。そして, これぞ付け足しそのものであり, 情報的に新たに何か価値あるものを加えているのではない。断定的な言い切りを避け, 自分の発言をなめらかにしたいという要請に従って plus other 句が追加されている訳である。

以上では, コーパス資料を検討しながら三つの疑問に答えてきた。最初に plus の頻度と言語使用域の関係を論じた。その結果, plus によく付与される「略式体」というラベルの内容を明らかにした。次に plus の接続詞用法の発達を BROWN と FROWN を比較しながら論じた。そして, plus の前置詞用法から接続詞用法に至るまでには現代英語でも中間段階的な plus 表現があることを示した。最後に, plus のコロケーションに関するデータをもとに, plus の advantage 用法と tag 用法の存在を例証した。そして結果としてこの結論は, 語の意味はお互いに共鳴し合うという Sinclair の意味的プロソディ論を支持する。

3. まとめ

本論では、plus という英単語について、辞書、語法書、Peterson (1999) からの情報をまず要約した。その上で、大規模コーパス CobuildDirect から得られたデータをもとに、plus の頻度、言語使用域、接続詞用法の発達、コロケーションから得られる plus の意味特徴を順に論じてきた。

残された問題点を二つ指摘しておく。第一は、接続詞用法と前置詞用法の関係である。本稿の目的は plus の詳細な記述にねらいがあったので文法化の問題には深入りするのを避けたが、文法化理論の視点から、その両者は一方向なのか、あるいは双方向なのか、理論的に詰めなければならない。また、文法化理論は、語彙範疇から文法範疇への言語変化のみを扱うとすると、plus の接続詞用法はどう説明するか、考えなければならない。第二に、plus の advantage 用法と tag 用法は、もしあるとすれば、どう意味的につながるのか、を今後調べなければならない。その際にコロケーションをどう定式化するのかという問題とも取り組まざるを得ない。

References

- 安藤貞雄, 山田政美 (編著) 『研究社現代英米語用法事典』 東京: 研究社, 1995.
 Burchfield, R. W. *The New Fowler's Modern English Usage*. Oxford: Clarendon Press, 1998.
 福井慶一郎 (著) 『現代英語の語法』 津: 三重学術出版会, 1996.
 Morris, William and Mary Morris. *Harper Dictionary of Contemporary Usage*. Second Edition. New York: Harper & Row, 1985.
 Peterson, Peter G. "Coordinators plus plus." *Journal of English Linguistics* 27: 2 (1999), 127-42.
 Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.
Webster's Dictionary of English Usage. Massachusetts: Merriam-Webster, 1989. [WDEU]

Dictionaries

- The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Oxford: Oxford University Press, 1994. [OED2]
 Pearsall, Judy (ed.) *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Clarendon Press, 1998. [NODE]
 Proctor, Paul (ed.) *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995. [CIDE]
 Sinclair, John (ed.) *Collins COBUILD English Dictionary*. London: HarperCollins. 1995. [Cobuild]
 Soukhanov, Anne H. (ed.) *Encarta Word English Dictionary*. New York: Bloomsbury Publishing, 1999. [EWED]
 寺澤芳雄 (編) 『英語語源辞典』 東京: 研究社, 1997.